

## 翻案小説とは何か？

——『アンジェリーナ・フルードの謎』をめぐる変奏、あるいは変装の主題

梶山 秀雄

文字通りの「作者の死」によって未完となった小説は数多く存在するが、チャールズ・ディケンズの『エドウィン・ドルードの謎』（1870年、以下、『エドウィン』と略記）もまた例外ではなく、発表直後から多くの推論や憶測が飛び交うことになった。それ以降も書評や論文は言うに及ばず、劇やラジオ、あるいはテレビドラマといったメディアを横断した翻案という形で、この物語に結末をもたらしようとする試みは、現在に至るまで盛んに行われている。<sup>1</sup>

この作品が読者のイマジネーションをここまで刺激する最大の理由は、探偵小説的要素が前面に押し出されている点である。コリンズの『月長石』の成功に影響を受けたディケンズは、本格的探偵小説『エドウィン』の執筆に着手したが、主人公エドウィンが失踪してから捜査が始まるあたり、全体のおよそ45%というところで中絶したため、それまでに書かれた原稿が作品の「謎」の「手がかり」となったのである。

『エドウィン』を題材としたアダプテーションは数多く存在するが、あまりにも多岐にわたるため、小説のフォーマットで発表された作品群に対象を限定しても、原作に忠実な「続編」が次々と出版されてきた。やがて探偵小説というジャンルが明確になるに従って、より精緻な「推理」を駆使して、ディケンズの残したマテリアルを料理し直した翻案小説が発表されるようになったのである。

こうした翻案小説には、邦訳されたものだけでも、ピーター・ローランド『エドウィン・ドルードの失踪』（1911年）、ブルース・グレイム『エドウィン・ドルードのエピローグ』（1933年）、直接的ではないが、『エドウィン』が作品中で重要な役割を果たす、二階堂黎人『魔術王事件』（2004年）があるが、共通するのは、それぞれの作家が生み出した探偵が独自の視点から「エドウィン・ドルードの謎」に挑むという趣向である。

本論では、いわゆる1920年代、英国ミステリ小説の「黄金時代」に活躍したオースティン・フリーマンの『アンジェリーナ・フルードの謎』（1924年）を中心に扱う。ここでも名探偵ソーンダイク博士がエドウィン事件の解明に乗り出しているが、フリーマンはどのように『エドウィン』を改装したのか。両者を比較分析しながら、これまで見過ごされてきた「変装」の主題から考察し、さらには探偵小説の翻案小説史に接続して論じたい。

<sup>1</sup>『エドウィン』の時代背景、執筆、出版に至る経緯、作品の批評史、および作品へのアプローチについては、拙稿『ディケンズ鑑賞大事典』（南雲堂、2007）の『エドウィン・ドルードの謎』の項（371-92）を参照のこと。

1841年にエドガー・アラン・ポーが発表した短篇「モルグ街の殺人」によって誕生した探偵小説という小説形式が、ジャンルとして開花したのは20世紀に入ってからのものである。特に、第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけての期間は、探偵小説の黄金時代と呼ばれ、恋愛や冒険といった余分な要素を排除し、純粋な謎解きを中心に据えた、俗に「本格推理小説 (classical whodunit)」と呼ばれる作品が数多く発表された。

1920年代後半には、アンソニー・バークリーが中心となって、ディテクションクラブ（イギリス推理協会）が発足し、それに対抗するように英国推理協会（CWA）が誕生、後者は推理小説作家だけではなく、ノンフィクション作家や編集者、書評家にまで門戸を開き、その年に最も優れた作品に対して「ゴールド・ダガー賞」を設立するなど、それまで亜流と見なされていた探偵小説を世間に認知させようとする動きが相次いだ。

そうした流れを受けて書かれたのが、ハワード・ヘイクラフトの画期的な探偵小説論『娯楽としての殺人』（1941年）である。探偵小説の起源を発掘しようとする試みにおいて、ヘイクラフトは「イギリス探偵小説の父」ウィルキー・コリンズとも親交のあったディケンズを「発見」する。ここで『エドウィン』が取り上げられていることから分かるように、この幻の探偵小説が推理小説愛好者の耳目を集めていたことは想像に難くない。

『エドウィン』に関する解釈は、ディケンズの死後から現在まで、膨大な数の推論が提出されており、その妥当性を子細に検討することは困難であるため、ここではポイントを整理するだけにとどめる。<sup>2</sup> 大前提となるのは、エドウィンが本当に殺されたかという点であるが、あくまでも失踪しただけだと見る「復活派 (resurrection school)」が最近のトレンドであるようだが、全体としてはやはり殺害されたとする見方が大多数を占めている。

通常、探偵小説で主眼となるのは、犯人は誰かという問題だが、これは叔父のジョン・ジャスパーということで、ほぼ意見は一致している。エドウィンの婚約者、ローザ・バッドに邪恋を抱いたジャスパーが、甥のエドウィンを排除しようとしたという、殺害の動機も作品中で示唆されている（更にエドウィンが死ぬことで、ジャスパーは莫大な財産を相続する）。となると残るのは、どのようにエドウィンは殺害されたのか、という犯行のトリックである。

探偵小説の創始者であるポーが、『バーナビー・ラッジ』の連載第一回目を読んだだけで、被害者＝犯人のトリックを見破ったエピソードは有名だが、これもディケンズは探偵小説の作法には関心がなかった、もしくは無自覚であったとするのが合理的な判断だろう。すなわち、探偵小説的な仕掛けはあくまでも肉付けであり、ディケンズが本当に描きたかったのは、ジャスパーの複雑な犯罪心理であり、探偵「小説」だったのではないか。<sup>3</sup>

<sup>2</sup> 『エドウィン』の結末についての精緻かつ広範な「推理ごっこ」については、小池滋訳『エドウィン・ドルードの謎』（白水社、2014）の「解説」（411-77）を参照。おそらくここではすべての可能性が検討されていると思われる。

<sup>3</sup> BBCドラマ版『エドウィン・ドルードの謎』（2012）では、このような観点から、エドウィンとジャスパーの血縁関係を中心に据え、「甥殺し」をドストエフスキー的な「父殺し」に解釈したドラマに仕立て上げている。

この作品の核心が、どのようにジャスパーがエドウィンを殺害、少なくとも物語から放逐したか、という点にあるとするならば、最大の障害は「探偵役の不在」である。これに関して、残された原稿の終盤近くになって舞台となる大聖堂クロイスタラムの町に登場する、謎めいた老紳士ディック・ダチェリーの正体については、批評家の間では諸説あるものの、事件を解決に導く探偵役を担うはずであったことは間違いない。

物語の終盤に登場する「クロイスタラムの新しい町民」(18章)ダチェリーの「白髪頭は人並み外れて大きく、白髪分量も人並み外れて多く、ふさふさとして」(189)いる。

He had an odd momentary appearance upon him of having forgotten his hat, when Mr Sapsea now touched it; *and he clapped his hand up to his head as if with some vague expectation of finding another hat upon it.*

‘Pray be covered, sir,’ entreated Mr Sapsea; magnificently implying; ‘I shall not mind it, I assure you.’ (195, emphasis added)

このように常に帽子を気にする素掘りをしているダチェリーが鬘を使用していることは明白であり、「変装」が物語を解決に導く過程において重要なファクターとして浮上してくる。

ジョン・フォスターは『ディケンズの生涯』の中で、ディケンズから漏れ聞いた結末を公表している。「物語は叔父が甥を殺す話になるはずで、その際、殺人の誘惑を感じたのは、自分自身ではなく、誰か他の人であったかのように扱われる点にあるというのであった」(Forster 11:2)。これは当初予定されていた挿絵画家であったチャールズ・コリンズが友人に語ったのとはほぼ同じもので、現在でも最も信憑性のあるものとされている。

さらに、このフォスター説は、引き継いで挿絵を担当したルーク・ファイルズや息子のディケンズ・ジュニア、娘のケイト・ディケンズのお墨付きをもらっている。こうした証言に加えて、有力な「物証」となるのが表紙絵の一番下に配置されたイラストである。おそらくクライマックスとして想定された場面において、ジャスパーらしき人物がエドウィンらしき人物と対峙している。もしエドウィンが死んでいるとしたら、これは誰なのか。

短篇「奇妙な依頼人の話」(1836-37年)や「追いつめられて」(1859年)に見られる、登場人物が犯人を追いつめて罪を告発するという筋書きをディケンズが構想していたとすれば、殺したはずのエドウィンが亡霊として再来するという展開(これもディケンズ読者にはお馴染みである)は、二重人格の持ち主であるジャスパーの良心を目覚めさせ、罪の自白を促すに十分な衝撃を与えたのであただろうことは想像に難くない。

ここで再び、このエドウィンが誰の変装であるかという問題に立ち戻る。ディケンズ・フェロウシップによる機関誌「ディケンジアン」誌が発刊された1905年には、カミング・ウォルターズが『エドウィン・ドルードの謎、解決の糸口』を発表したが、ここで提起された結末で最も論議を呼んだのが、ダチェリーをヘレナ・ランドレスの男装とする説である。

確かにヘレナには男装の傾向があることが作品中で言及されている。<sup>4</sup>

このウォルターズ説は、危険な異性装の思想に繋がるものとして、ディケンズ愛好者からは猛烈な反発を食らったが、しばしば指摘される『マクベス』からの影響を勘案すると（その場合、エドウィンは死んでなければならない）、『ヴェニス商人』や『十二夜』といった男装が作品の要となるシェイクスピア劇から、ディケンズがこの「ダチェリー＝ヘレナ・ランドレス」の変装の着想を得たとしても不思議はない。

黄金時代に活躍したジョン・ディクスン・カーの『「エドウィン・ドルードの謎」への解答』もまた、このヘレナの男装癖に注目している。ここでの推理は、エドウィン殺害説の立場を採っており、あくまでも「フェア・プレイ」の精神——読者には十分な手がかりが与えられており、合理的な思考によって解決が導かれるという前提に基づいている。しかしながら、前述したようにディケンズの時代には、そのようなジャンルの意識は希薄であった。

このディクスン・カー論で拝聴に値するのは、『エドウィン』がライヴァル視したというコリンズの『月長石』と比較するくだりである。『月長石』の主人公と同じように、『エドウィン』でも、ジャスパーはエドウィンを殺害していないのに、殺したと思い込んでしまう。どちらも阿片吸引による人事不省、あるいは記憶喪失が原因であり、ジャスパーは死体を処理しただけの事後従犯者に過ぎず、真犯人は別にいるという結論を出している（8-9）。

このように、『エドウィン』を「エドウィン・ドルードを殺害したのは誰だったのか」という永遠の命題をめぐる小説であると捉えれば、読者の数だけ解決が存在することになる。逆に言えば、そこに後世の作家を挑発する要素があり、翻案小説が書かれる所以があると言える。「誇張でもなんでもなく、筋書きに関する作者の意図について、『エドウィン・ドルードの謎』ほど多くの評言や推論が提出された未完小説はないだろう」（Kitton 292）。

## II

オースティン・フリーマン『アンジェリーナ・フルードの謎』は、ソーンダイク博士が活躍する長編の第9作目として1924年に発表された。この〈ホームズのライヴァルたち〉として位置付けられるソーンダイク博士シリーズは、1908年から『ピアスンズ・マガジン』に短篇として発表され、法医学の専門家であるソーンダイク博士が、警察からの委託を受けて犯罪現場に赴き、科学捜査に基づいて事件を解決するという設定になっている。

この作品がシリーズ中でも異彩を放つのは、タイトルに冠された主人公の名前の類似からも明らかのように、ディケンズの絶筆となった『エドウィン』を下敷きにした、翻案小説であるという点である。フリーマンは未完の作品に再び息を吹き込み、ソーンダイク博士の手によって「エドウィン・ドルード問題」に最終的な解決をもたらそうとしているの

<sup>4</sup>「（ヘレナは）いつでも妹は男の子のなりをして、男のような勇気を見せました。（中略）いまでも憶えています、妹が髪の毛を短く切るつもりでいたポケット・ナイフを僕がなくなってしまった時、妹は必死になって自分の髪をむしり取ろう、食い切ろうとしていました」（58）

である。<sup>5</sup>

物語の導入部で、語り手であるジョン・ストレンジウエイズ医師は、往診の要請を受けて、謎の女性(アンジェリーナ・フルード)の診察を行うことになる。傍らには夫とおぼしき男(ニコラス・フルード)、壊されたドア、そして女性の首筋には紐状で絞められた痕跡。明らかに事件性を感じながらも、診療を終えたストレンジウエイズは帰途に就く。やがて赴任地のロチェスターで、この二人に巡り会うことになるのだが――

この時点で既に、ニコラス・フルードには明らかにコカイン(もしくは阿片)中毒の徴候が認められ、さらにはアンジェリーナに対する家庭内暴力の可能性も示唆されている。ここから読み取られる二重人格とも思われる内に秘めた暴力性を加味すれば、ニコラスが原作となった『エドウィン』の「エドウィン失踪事件」の最重要参考人物ジョン・ジャスパーの写し絵であることを読者に確信させるに十分である。

しかしながら、こうした扇情小説的な幕開けは同時に、ディケンズが『エドウィン』を執筆する際に年頭に置いたと伝えられるコリンズの『月長石』ではなく、『白衣の女』(1870年)の肌合いに近いものがある。語り手の前に忽然と現れ、正体を明かすことなく去っていく謎の女性のアイデンティティは、この物語の通奏低音ともなっており、変装によるなりすましが重要なテーマになっているなど共通点は多い。

実際に、物語はストレンジウエイズの一人称で進行し、アンジェリーナと再会して恋愛感情を抱くにいたるが、またしても彼女は姿を消してしまう。以降、ストーリーはアンジェリーナの行方の捜索――失踪時の装飾品が次々と発見され、死亡または殺害の可能性が高まるにつれて、そのほとんどが死体の発見に費やされる。つまり「誰がやったか? (whodunit)」ではなく、「どうやったか? (howdunit)」へと事件の関心がスライドする。

ストレンジウエイズに随行するピーター・バンディの、犯人が誰かという問いに対して、ロチェスター警察署の巡査部長コブルディックは以下のように答えている。

“They will always begin at the wrong end. The question, ‘Who is the murderer?’ does not arise until it is certain that there has been a murder: and it can’t be certain that there has been a murder until it is certain that the missing person is dead. And that certainly can hardly be established enough to justify us in making other inquiries, and they may give us a hint where to look for the body. ....” (92)

この遺体の身元確認という展開が、フリーマンの「ミスリーディング (misleading)」であることは疑いない。いかにもニコラス・フルードが犯人であると見せかけて、アンジェリーナの遺体発見によって犯行が確定されるように読者は誘導されているのである。

このように「犯人が誰か」から「死体はどこか」への転回が、フリーマンの『エドウィン』に対する回答である。ディケンズは連載を開始する際、1965年8月20日の付けの  
<sup>5</sup>フリーマンは、この主人公の名前を「お遊び心から」オリヴァー・ゴールドスミス詩「隠者、もしくはエドウィンとアンジェリーナ」から付けたと書いている (Donaldson 153)。当該部分の考察については、伊井順彦『アンジェリーナ・フルードの謎』(論創社、2016)の「解説」を参照。

ノートに17の表題候補を残しているが、その中に「エドウィン・ドルードの失踪」(“The Disappearance of Edwin Drood”)というものがある。このメモが「復活派」の最大の証拠になっており、フリーマンの説もそれに追従しているように見える。

フリーマンが探偵小説史に名を残したのは、科学的な正確さに即した犯罪捜査を行う、ソーンダイク博士という名探偵を生み出したこともさりながら、「倒述推理小説 (inverted mystery または howcatchem)」という形式の発明が大きい。『歌う白骨』(1912年)は、最初から犯人の正体を明らかにして、犯行の模様を描いた後に、ソーンダイク博士が微細な手がかりを元にして真相にたどりつく経路を描くタイプの作品を取録した短編集である。<sup>6</sup>

そのように考えると、『アンジェリーナ』もまた、この形式を踏襲していると考えても不自然ではない。つまり、引用部分でも明らかなように、ここでは誰が犯人であるかは問われず、あくまでもアンジェリーナが失踪した真相を解明する過程を描くことが主眼とされている。そして、『エドウィン』もまた、そうした倒述推理小説として構想されたのではないかという発想こそが、この翻案小説の要諦であり、フリーマンの独自性なのではないか。

探偵小説の歴史からすれば、あくまでもディケンズは傍流の存在であり、『バーナビー・ラッジ』において探偵趣味が濃厚であることは認めながらも、『荒涼館』にしても「偶然に探偵小説を『劇中劇』として含んだ、典型的なディケンズの大作」としか評価されていない。すなわち、ディケンズは探偵小説というスタイルの樹立には及ばず、『エドウィン』もまた、その延長線上にあるとする考えも根強いものがある。

他方、『エドウィン・ドルードの謎』をウィルキー・コリンズの『月長石』に触発された本格的探偵小説として構想されたと考える読者は、その結末を予想することに腐心する。しかしながら、ディケンズの探偵小説家としての評価が低いことから分かるように、『エドウィン』においても「意外な犯人」といった探偵小説的な要素が含まれている予兆は希薄であり、その意味では、残された断片の「誤読 (misreading)」と言わざるを得ない。

こうした「読み」の典型的な例が、ジョン・ディクスン・カーに代表される推理小説作家によって提出される「推理」である。チェスタトン、バーナード・ショー、リリアン・デラ・トーレといったメンバーに共通するのは、いかにも犯人らしく描かれているジャスパーを除外して、エドウィン殺害の真犯人を名指しする身振りである。そこには探偵小説というジャンルが定着した時代のパースペクティブから発信されたものであるというメタ認知が欠けている。

換言するならば、こうした解釈は『エドウィン』が書かれた最大の動機が「犯人当て」にあるという大前提に基づいている。この小説に描かれている全てはパズルのピースであり、最終的な事件の解決に向かって統合されるべき「手がかり」として解釈される。それ故に、推理小説家は決してジャスパー犯人説を採用しない。なぜならば、探偵小説においては最も疑わしくない人物が犯人であることを読者が欲するからに他ならない。

フリーマンもまた、そうした推理小説家のひとりであることは間違いがないが、自身の発

<sup>6</sup>この手法は、現代でも「刑事コロンボ」や「古畑任三郎」といったテレビドラマの定番として使われている。探偵よりもさきに読者（もしくは視聴者）が犯人を知っている優越感に浸れるという点でも、画期的なアイデアであると言える。

案した倒述推理小説というテクニクが、そのような「犯人当て」の軌から逃れることを可能にさせた。フリーマンがエドウィン失踪説に傾いたのも、自然な成り行きである。『エドウィン』の解説を通してフリーマンが目指したのは、ディケンズが構想した「謎」の解明ではなく、倒述推理小説という小説の「構造」の再現だったのではないだろうか。

### III

我が国の近代文学の歴史において、海外作品の移入は非常に大きな役割を果たしてきた。もちろん、明治以前の日本作品を無視することは出来ないが、探偵小説という形式は他のジャンルに比べて格段に翻訳作品の影響を濃密に受けて発展してきたのである。その際に主流となったのが、当時の読者に馴染みやすいように、舞台や登場人物を日本名に置き換えて、あらすじだけを追った小説——すなわち、黒岩涙香を嚆矢とする翻案小説であった。<sup>7</sup>

現在でこそ、知る人ぞ知る存在になってしまった感のあるフリーマンであるが、我が国の探偵小説の翻訳史においては、牽引車的な役割を果たしていた。『アンジェリーナ』が『男装女装』として、平凡社の「世界探偵小説全集」第16巻として発刊されたのは、昭和5年(1930年)であり、原作が発表されてから、わずか6年後のことである。<sup>8</sup> あくまでも抄訳に過ぎないが、このインターバルの短さは尋常なものではない。なぜ数あるフリーマンの長編の中で、この作品が選択されたのか。

ここでフリーマンの移入の先達であった三津木春影が、ドイルと並ぶ大物であるモーリス・ルブランの紹介者でもあったという点は注目に値すると思われる。翻案小説としての『男装女装』は、タイトルでトリックを割ってしまっているアンフェアな課題であるが、このルブラン＝アルセヌ・ルパンの文脈に置くことで納得がいくものとなる。ルパンの代名詞である「変装」という主題が、当時の読者の胸を躍らせる格好の題材だったのである。

アンジェリーナ失踪の真相は、夫ニコラスの追跡から身を隠すために考案された、自作自演の殺人事件であった。アンジェリーナは単なる脇役に過ぎない「最も怪しくない人物」バンディに変装することで、大胆にも語り手＝ストレンジウエイズと行動を共にしながら、自らの遺留品を次々と発見させるように仕向け、最終的にはロンドンで買い求めた遺骨を大聖堂の壁の中に埋め込んで、その存在を完全に消し去ろうとした。

ここでいう変装とは、名探偵シャーロック・ホームズや怪盗アルセヌ・ルパン、あるいは怪人20面相から連想される変幻自在のそれではなく、あくまでもメーキャップや服装を変える程度のことであり、仕草や歩き方、表情や話し方といった些細な演技で構成される「はったり」で、ソーンダイクは「バンディ氏は、眼鏡以外、なんの変装もしておりません。単にフルード夫人が髪を切り、男性の格好をただけ」(161)と看破する。

<sup>7</sup> 海外の探偵小説の愛好者であった黒岩涙香は、ヒュー・コンウェイの『暗い日々』を原作にして『法庭美人』として刊行した(1889年)。この序文の中で、涙香は原書を一度読んだだけで、後は記憶に従って書くと述べている。これが翻訳でもなく抄訳でもない翻案小説の誕生の瞬間である。

<sup>8</sup> この長編の(妙)訳者は、時代風俗小説を得意とした邦枝完二であり、当時の文人が探偵小説を愛好したことがうかがわれて興味深い。これについては多くの先行研究がなされているので、ここでは深く立ち入らない。

真相解明のきっかけとなったのは、一人二役を演じているのではないかと疑念を抱いたソーンダイクが、アンジェリーナとバンディの写真を入手、同じサイズに加工した上で、顔の部分だけをすげかえて比較するという手法であった。これに加えて、両者の完全な指紋を入手したことで、二人が同一人物だと確定出来たという、まさに「医者と法律家の合の子みたいな存在」(79)の本領発揮であるとも言える展開である。

こうした医学テクノロジーを駆使した捜査は、ディケンズが『エドウィン』の生石灰しょうせっかいのトリックにも容赦なく向けられる。エドウィンを殺害したジャスパーは、死体を生石灰の山に埋め込んで始末しようとし、腐食作用を受けない時計やネクタイピンを川に投げ込んで、警察の目をくらませようとする。当時は誰もが生石灰が皮や肉ばかりではなく、骨まで腐食させると信じていたがこれは俗説であるとソーンダイクは切って捨てる(145)

このような科学的バックグラウンドに裏付けられた捜査を可能にしたのは、20世紀に入ってから急速に進歩したテクノロジーであるが、それは、あらゆる思い込みを排除し、純粹な論理的な推理によって事件が解決に導かれる「本格推理小説」の出現をも意味していた。必要な手がかりは、テキスト内に提示されており、名探偵ならずとも真相に到達することが出来るという、「読者への挑戦」(エラーリー・クイーン)が成立する由縁である。

我が国にフリーマンが盛んに翻案されたのも、こうした科学的かつ実証的な捜査法が歓迎されたからに他ならない。すなわち、探偵小説は単なる暇潰しの読み物ではなく、科学的精神を伝える啓蒙的な側面を有し、同時に論理に裏打ちされたデモクラティックな近代精神の移入をも担っていたのである。その意味では、当時の文人がこぞって探偵小説に興味を惹かれ、自らも実作に乗り出したとしてもなんら不思議はなかったのである。<sup>9</sup>

しかしながら、そうした民主主義が探偵小説の「外部」においても実現されているかという、必ずしもそうとは言えない。男女間の平等が実現したら、という仮定を持ち出したソーンダイクに、アンジェリーナは以下のように反論する。

... “No doubt, when the equality of the sexes is an accomplished fact, things will be different.”

“It will never be an accomplished fact;” said Angelina. “The equality of the sexes is like the equality of the classes. The people who roar for social equality are the under-dogs; and the women who shout for sex equality are the under-cats. Normal women are satisfied with things as they are.”(162-63)

この保守的な意見に対して、ソーンダイクもまた「男性と躍起になって張り合う女性は、他の女性とは張り合えないのかも知れない」と同意している。

『エドウィン』においてヘレナ・ランドレスが変装しているという解釈に猛然と抗議の声が上がったように、男装という行為は当時の社会情勢において、男女の境界を侵犯する禁<sup>9</sup>ブロードウェイのミュージカル版『エドウィン・ドルードの謎』(1985年初演)では、観客の投票によって結末が決まるという斬新な手法を導入している。まさに推理という行為が民主主義的なバックグラウンドに拠っているという証左であろうか。

忌であると思なされていた。ここでアンジェリーナは自らがそれを犯したことを察知して、糊塗しようとしているのではないか。<sup>10</sup>そして、そうした男性中心主義的な認識は、ソーンダイクのみならず、作者であるフリーマンにも、同時代の推理小説作家にも共有されていたと考えられる。

皮肉なことに「ミステリの女王」アガサ・クリスティに代表される探偵小説の黄金時代においても、こうした男性中心主義は依然として存在していた。『誰の死体?』で知られるドロシー・L・セイヤーズは、自身がフェミニストであるにも関わらず、そのように呼ばれることを嫌悪していた。後に英国推理協会が結成される契機ともなったディテクションクラブの排他的な風潮においては、そのような話題はタブーだったのである。

ルーシー・ベアトリスは女性作家であったが、女性嫌悪の風潮が売り上げに影響するのを恐れて、最初の二作品はJ・キルマニー・キースというユニセックスな筆名で、第三作目にはアンソニー・ギルバートのペンネームで作品を発表した。その際、偽の履歴を作成し、口髭をつけた年配の男性に扮装した作者近影を作成、出版社を見事に騙すことに成功して、真実を知るエージェントを面食らわせたというエピソードがある (Edwards 237)。

このように女性作家は、男性作家になりすますことで、その存在を受け入れられるというのが推理小説の黄金時代の実情であった。ディテクションクラブ設立の目的が、スリラーに埋没されない「純粋な」本格推理小説の画定であることを考慮すると、「変装」はそうしたアイデンティティの透明性を毀損しかねない危険な存在である。実際に『男装女装』ではアンジェリーナの発言は割愛されており、日本の読者は無邪気に純粋な探偵小説として享受していたのではないか。

本格推理小説とほぼ同じ時期に誕生したフロイトの性理論が世を席卷するにつれて、ディテクションクラブも変化を余儀なくされる。ベアトリス・アデラ・レストレンジ夫人は、『誰の死体?』(ドロシー・L・セイヤーズの作品とは別作品)で、やはり女性が男性になりすますトリックを用いて、殺人者の心理的な欲望を中心のテーマに据えた。だから登場人物ブラッドレー夫人は問いかけるのだ。「ねえ、性的抑圧って聞いたことある?」と。

## 結語

以上のように、『エドウィン』をめぐる変奏から明らかになるのは、この作品が二重に「開かれたテキスト」であるという点である。小説自体への解釈は言うに及ばず、結末に関する推論が続編という形で新たな作品を産み出す。それはまた、時間的・空間的な隔たりを超えて、インスピレーションを刺激し、オリジナリティを盛り込むことを可能にする。しかしながら、それは「改作」ではなく、翻案された作品の時代精神を否が応でも担ってしまうのである。

ここで我が国の文化全般を俯瞰すると、音楽やファッションの分野においても、「コラボ

<sup>10</sup> 未見だが、ブロードウェイミュージカルの日本版『エドウィン・ドルードの謎』(2016年)には、元宝塚女優の壮一帆がエドウィン役(つまり男装)としてクレジットされている。宝塚歌劇団という特異な存在については、男装という行為の侵犯性を論じる文脈からは外れるので別稿に譲る。

レーション」や「フューチャリング」の文字に溢れていることに改めて気づかされる。挿絵が売り上げに重要な役目を果たすライトノベル、オリジナルアルバムよりも多いのではないと思われるほどのカバーアルバムやトリビュートアルバム、こうした現象は果たして現代に特有のものなのだろうか。もはや我々は新しいものを創り出すリソースを掘り尽くしてしまったのだろうか。

現代小説の分野においても、やはりこうしたリスペクト、あるいはオマージュ現象は散見される。古川日出男『二〇〇二年のスロウ・ボート』（2003年）（村上春樹）、林信彦『うらなり』（2006年）（夏目漱石）、奥泉光『シューマンの指』（2010年）（シューマン）など、数え上げればきりが無い。その意味では、翻案小説をアダプテーションの文脈の中で読み解くことで、その本質に迫ることを目的とした本論にもまた、現代的な意義があると考えている。

『アダプテーションの理論』の中で、リンダ・ハッチオンは「ヴィクトリア朝時代の人たちには、まさにありとあらゆる物語を翻案する——しかも考えられるあらゆる方向に作りかえる習慣があった。詩や小説や戯曲やオペラ、また歌や踊りから活人画にいたるまで、物語と呼べるものはすべて絶えずひとつの媒体から別の媒体へと適合させられ、そしてまた逆にもとの媒体へと戻されたのである」（vii）と述べている。

こうしたアダプテーションの状況は現代においても、あくまでも展開されるメディアの種類が増えただけで変化はない。問題となるのは、アダプテーションを「原作」よりも重要でない派生的なものとして片付けてしまう態度である。各々のテキストはかつてハロルド・ブルームが『影響の不安』で述べたような歴史的な産物ではなく、あくまでも インター テクスチュアリティ 性を有するネットワークの一部として、階層化されることを否定し続けるのである。

## 参考文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Vintage, 2002.
- Austin, R. Freeman. *The Mystery of Angelina Frood*. USA: A Wildside book, 2015.
- . *The Singing Bone*. USA: Createspace Independent Publishing Platform, 2016.
- Boyd, Aubrey. "A New Angle on the Drood Mystery." *Washington University Studies* 9 (1922): 35-85.
- Connor, Steven. "Dead? Or Alive? *Edwin Drood* and the Work of Mourning." *Dickensian* 89 (1993): 85-102.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. London: Dent, 1994.
- . *Bleak House*. London: Dent, 1994.
- . *The Mystery of Edwin Drood*. London: Dent, 1996.
- Donaldson, Norman. *In Search of Dr. Thorndyke*. Ohio: Bowling Green University Popular Press, 1971.

- Duffied, George Howard. “John Jasper – Strangler.” *The Bookman* 70 (1930): 581-88.
- . “The Macbeth Motif in *Edwin Drood*.” *Dickensian* 30 (1934): 263-71.
- Edwards, Martin. *The Golden Age of Murder—The Mystery of the Writers Who Invented Modern Detective Story*. London; Collins Crime Club, 2016.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. London: Dent, 1968.
- Hutcheon, Linda. and Siobhan O’Flynn. *A Theory of Adaptation*. New York: Routledge, 2006.
- Kitton, Fredric G. *Dickensiana: A Bibliography of the literature Relating to Charles Dickens and His Writing*. 1886. New York: Haskell, 1971.
- Miller, D. A. *The Novel and the Police*. California: University of California Press, 1988.
- Proctor, Richard A. *Watched by the Dead: A Loving Study of Dickens’ Half-Told Tale*. London: W. H. 1887.
- Rowland, Peter. *The Disappearance of Edwin Drood*. New York: St. Martin’s Press, 1991.
- Schaumburger, Nancy E. “The ‘Gritty Stages’ of Life: Psychological Time in *The Mystery of Edwin Drood*.” *Dickensian* 86 (1990): 158-63.
- Tomalin, Claire. *Charles Dickens: A Life*. London: Penguin Books, 2011.
- Walter, J. Cuming. *The Complete Mystery of Edwin Drood: The History, Continuations, and Solutions (1870-1912)*. London: Chapman and Hall, 1912.
- . *Clues to Dickens’s “The Mystery of Edwin Drood”*. 1905. New York: Haskell, 1970.
- J・デュポア『探偵小説あるいはモデルニテ』鈴木智之訳（法政大学出版局、1998）
- R・オースティン・フリーマン『アンジェリーナ・フルードの謎』西川直子訳（論創社、2016）
- .『男装女装』邦枝完二訳（平凡社、1930）
- ジョン・ディクソン・カー.『「エドウィン・ドルードの謎」への解答』、『ミステリマガジン』5月号(1982):6-13.
- ジークフリート・クラカウアー『探偵小説の哲学』福島義憲訳（法政大学出版局、2005）
- チャールズ・ディケンズ『エドウィン・ドルードの謎』小池滋訳（白水社、2014）
- ブルース・グレイム『エドウィン・ドルードのエピローグ』森沢くみ子訳（原書房、2014）
- 小池滋『ディケンズとともに』（集英社、1983）
- 西條隆雄、植木研介、原英一、佐々木徹、松岡光治編著『ディケンズ鑑賞大事典』（南雲堂、2007）
- 二階堂黎人『魔術王事件』（講談社、2004）